

中国社会主义とマルクス「疎外論」上

Chines Socialism and “Entfremdung” in Marxism

菅 沼 正 久*

Masahisa Suganuma

目 次

- I マルクス「疎外論」と現代
 - 1 「疎外論」回想 以上
 - 2 経済学説史と経済史の接点
- II マルクス「疎外論」の位相
 - 1 マルクス「疎外」について
 - 2 前「疎外」的状况
 - 3 私有財産の止揚としての共産主義
- III 「疎外論」の進化
 - 1 「疎外論」における労働と私的所有
 - 2 労働力所持者と貨幣所持者
 - 3 株式会社——私的所有としての資本の廃止
 - 4 いわゆる「否定の否定」以降
- IV 後「疎外」的状况
 - 1 社会主義の沿革
 - 2 私有制変革
 - 3 「旧社会の母斑」考
- V 現代社会主義と「疎外」
 - 1 現代社会主義考
 - 2 社会主義論の弯曲

- 3 共有制と市場経済
—「社会主義初級段階」—

I マルクス「疎外論」と現代

1 「疎外論」回想

嶋田力夫さんが『経済志林』1991年6月号に「マルクス〈序説〉プランの形成に関する一考察—「パリ・ノート」(1844~45年)と『経済学・哲学草稿』(1844年)との関連を中心に」を發表してから10年の歳月が流れた。またそれは現代社会主義の異変の10年でもあった。

マルクスの著作の發表された1844~45年から1991年に至る一世紀半と比べて、嶋田さんの前稿から今回の論稿に至る10年の歳月とは、期間の長短以上に「社会主義」そのものの運命の変遷として深刻である。

1991年12月ソ連社会主義が消滅した。中国社会主义も1989年「六・四事件」(天安門広場事件)を経験した。社会主義の「冬の時代」の到来である。

いま嶋田さんの新しい労作を手にして感想が深刻であるのは、我々が社会主義の「祖国」の消滅を体験したからである。嶋田さんの研究の主題で

*名誉教授

ある、マルクス「疎外」論の見地に立てば「自己疎外の止揚」(マルクス)を達成した一つの国の社会主義社会が消滅するなどということは、既往の理論界において予定されなかったことである。

私がいま「疎外論」に立ち帰るモメントには二つある。一つは言わずもがなのことであるが、嶋田さんの研究による触発である。もう一つは、ソ連の消滅した社会主義、そして1989年「六・四事件」(天安門広場事件)を引き起こした中国をふくむ「現代社会主義」考である。ソ連と中国という「現代社会主義」の巨大な疎外現象は、「自己疎外の止揚」(マルクス)との関連で、「疎外論」が回避することのできない論点である。

「疎外論」研究について、私が以前から抱えていた問題は、私の専門分野である農業問題にある。農業問題の「疎外論」的研究である。私はこれを「前疎外状況」と呼んでいる。資本主義の「私的所有」(「私有財産」)制と賃労働制度が出現する以前の状況、マルクスの説く「ヨーロッパ中世」の「疎外論」的考察が主題をなす。私の意図と関連するマルクスの論述を回想する。

「人的従属関係が物質的生産の社会関係をも、その上に築かれている生活の諸部面をも特徴づけている。しかし、まさに人的従属関係が、与えられた社会的基礎をなしているからこそ、労働も生産物も、それらの現実性とは違った幻想的な姿をとる必要はないのである」(『資本論』第1巻第1章商品、S.91)。

私は「ヨーロッパ中世」が「近代資本制」社会に移行する状況を「前疎外状況」と呼んでいるが、それは「物質的生産の社会的諸関係」において、その「現実性」が失われ、その「現実性とは違った幻想的な姿」に転変する事態である。

2 経済学説史と経済史の接点

本稿の冒頭において嶋田さんは論点について次のように述べている。

「『第一草稿』におけるA.スミス経済学体系の批判が中期マルクスにおける『経済学批判要綱』体系プランの形成にとっていかなる理論的意義を有していたか」。

「第一草稿」の後半部分としての「疎外された

労働」の叙述展開が、中期マルクスの「経済学批判体系プラン」の形成にとっていかなる契機をなし、かつそれがいかなる理論的意義を有するものであったか」。

新稿はこの設問に答えるものであった。我々はすでにその(1)の部分を手に行っている。(2)の部分の待つ。

因みに前稿(1991年6月)を読んだとき『経・哲草稿』(岩波版)のP.104の欄外に、私は「時永～嶋田 1991年8月12日」と註記している。該当の『草稿』本文は次の如くである。

「労賃は疎外された労働の直接の結果であり、そして疎外された労働は私有財産(私的所有)の直接の原因である。だから一方の側面とともに他方の側面もまた没落せざるをえないのだ(以下省略)」。

これにつづく論述は「私有財産等々からの隷属状態からの社会の解放が労働者の解放という政治的なかたちで表明される」というくだりである。

これに匹敵する叙述は第三草稿[二][私有財産と共産主義]の節にある「自己疎外の止揚」である。

今からほぼ10年まえの註記とマルクスの論述との関連が何であったか、思い起すことはできない。したがって当時注目したと思われるマルクスの論述をたどるしかない。そこには「労賃—疎外された労働—私的所有制—その社会的諸関係の没落—社会の解放、労働者の解放—一般的人間的な解放—真に人間的なそして社会的な財産」という文脈が認められる。それは私の理解では、資本主義から社会主義に至る変革の文脈である。勿論、その論点は第三草稿[二][私有財産と共産主義]という節において展開されている。それは学説的展開である。

しかし、昨今=20世紀下半期における「現代社会主義」の歴史的な転換という事態のもとでは、経済史の手法を用いた考察が必要なのではないか。いま、経済史の手法を用いた考察を全面的に試みる状況にないが、学説史と経済史の接点という視点から考察したいところである。

補遺。Entfremdungは邦訳は「疎外」であるが、中国語訳は「異化」である。辞典は「対立物

と化す」という解釈をほどこしている。「外化して対立物と化す」という意味であろうか。漢字の用法としては、私は中国語訳が適当のように思う。

II マルクス「疎外論」の位相

1 マルクス「疎外」について

私は嶋田力夫稿の示唆を受けて、マルクス「疎外」概念について『経・哲草稿』（1844年、本稿は主として岩波文庫版に依存する）と『資本論』（1867年）を渉猟する。両著作には20年の経庭があるが、疎外概念も後者において成熟をみる。関連して『経・哲草稿』は経済学説史的手法、『資本論』は、経済学的あるいは経済史的手法による研究が適切と考える。

マルクスは「疎外」について『草稿』の第一草稿〔四〕「疎外された労働」の項で要約している。そこでは「労働の対象化」にはじまり、「外化された労働」の産物としての「私有財産」、「賃金の下僕」としての労働、「疎外された労働の直接の結果」としての労賃、そして「疎外された労働は私有財産の直接の原因である」などと論述している。

マルクス研究者二人の「疎外」の概念規定を紹介する。その一つは「英訳モスクワ版の序文」（『草稿』国民文庫版P.14）である。

「マルクスは疎外概念についてまったく新しい経済的、階級的、歴史的な内容を与える。マル

クスが「疎外」あるいは「外化」によって意味するのは、労働者が資本家のために強制される労働、労働者の労働の生産物を資本家が我がものとする取得、生産手段が資本家に所有されているために労働者にたいしてそれが或る疎遠な、奴隷にさせるような力として立ち向かうところの、労働者からの生産手段の切り離しである。ここでマルクスは資本主義的搾取の性格を表わす諸特徴についての説明に近づく」（国民文庫版『経・哲手稿』英訳モスクワ版の序文P.14）。

ちなみにこの英訳モスクワ版序文は「ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所」による。もう一つはフランス人、エミール・ポッティジェリの「疎外概念」である。これは『草稿』フランス語版の訳者序文である。（同前P.247）

「人間の本质を完全に実現し、真の社会において開花する全体的人間とは、過去の歴史全体の結果であろうところの未来の人間である。マルクスにとって、このような人間の到来の条件は明らかである。すなわちそれは私的所有の廃止と、疎外を終らせる共産主義の建設とによって生じるであろう。歴史上の新時代がそのときひらけるであろう。そして私的所有の支配に対応する時期は人間の自己自身との分裂の時期であろう」。

マルクス「疎外論」は『草稿』執筆から20年後の『資本論』においてより成熟した視角と論述をみることができる。『資本論』における疎外の論述は邦訳大月版事項索引にみる。

第I巻	4篇	相対的剰余価値の生産
	7篇	資本の蓄積過程
		同
		同
第III巻	1篇	剰余価値の利潤への転化と剰余価値率の利潤率への転化
	3篇	利潤率の傾向的低下の法則
	5篇	利子と企業者利得とへの利潤の分裂 利子生み資本
	7篇	諸収入とそれらの源泉

13章	機械と大工業	S.455
21章	単純再生産	S.596
22章	剰余価値の資本への転化	S.635
23章	資本主義的蓄積の一般法則	S.674
5章	不変資本充用上の節約	S.95、S.96
15章	この法則の内的な諸矛盾の展開	S.274
36章	資本主義以前	S.610
48章	三位一体的定式	S.825、S.832、S.838

2 前疎外的状況

マルクスはこうした疎外概念の規定にあたって、「第一草稿」において、三分法つまり労賃（労働者）、資本の利潤（資本家）そして地代（地主）という社会構成体を前提した。しかし、この学說的展開は経済史（的過程）的にみると、その前史に至る。つまり「前疎外的状況」である。生産手段の私的所有に基礎をおく自己疎外は、そのような事態に先行する歴史的時代と対比するときその経済史的特徴は鮮明である。

私はマルクスとともに「ロビンソンの明い島」から暗いヨーロッパの中世に目を転じる。ここでは「労働や生産物は夫役や貢納として社会的機構のなかにはいって行く。労働の現物形態が、そして商品生産の基礎の上でのように労働の一般的ではなく、その特殊性が、ここでは労働の直接に社会的な形態なのである。夫役は商品を生産する労働と同じように、時間で計られるが、しかしどの農奴も、自分が領主のために支出するものは自分自身の労働の一定量だということを知っている。坊主に納めなければならない十分の一税は、坊主の祝福よりもはっきりしている。それゆえ、ここで相対する人々がつけている仮面がどのように評価されようとも彼らの労働における人と人との社会的関係はどんな場合にも彼ら自身の人的関係として現われるのであって、物と物との、労働生産物と労働生産物との、社会的関係に変装されてはいないのである」（『資本論』第1巻第1章商品S.91～92）。

この叙述についてマルクスは「自分の必要のために穀物や家畜や糸やリンネルや衣類などを生産する農民家族の素朴な家長制的な勤労」を例証として、私の言うところの「前疎外的状況」を解明する。

「これらのいろいろな物は、家族にたいして、その家族労働のいろいろな生産物として相対するが、しかしそれら自身が互いに商品として相対しはしない。これらの生産物を生み出すいろいろな労働、農耕や牧畜や紡績や織布や裁縫などは、その現物形態のままで社会的な諸機能である。というのは、これらは商品生産と同様にそれ自身の自然発生的な分業をもつ家族の諸機能だからであ

る。男女の別や年齢の相違、また季節の移り変わりにつれて変る労働の自然的諸条件は、家族のあいだでの労働の配分や個々の家族成員の労働時間を規制する。しかし継続時間によって計られる個人的労働力の支出は、ここでははじめてから労働そのものの社会的規定として現われる。というのは個人的労働力がはじめてからただ家族の共同的労働力の諸器官として作用するだけだからである」（『資本論』同前）。

「前疎外的状況」の特徴は、「家族の共同的労働力」による「家族労働」、およびその生産物の状況にみる如くである。諸労働は労働の「現物形態のままで社会的な諸機能」を果たす。

しかし、この「前疎外的状況」は農業生産力の発展、剰余生産物の生産力の発展につれて急速に変貌する。家族経営が分解（階層分解）し、富農と貧農に分化する。家族労働力はある家族において解体し、その一部分は労働力商品に転化し、ある一部分は家族労働力の形態を保持し、農業の自給的部分において機能する。家族労働は基本的に解消し、富農の雇用労働として純化する。家族経営の分解につれて、土地をふくむ家産は一方においては個別資本に転化し、他方においては生活資料として縮小変化する。「農民家族の素朴な家長制的な勤労」（同前）は解消し、「労働と資本と土地との分離」、「労賃と資本利潤と地代との分離」「分業、競争、交換価値の概念」つまり「疎外された労働」（『経・哲草稿』P.84）の社会関係が出現する。

3 私有財産の止揚としての共産主義

自己疎外は、疎外を規定する条件の変化につれて変化する。第三草稿は「一」において「私有財産と労働」を論じる。重農主義における土地と労働に関する学説を批判して産業資本に到達する。

「富は産業的な富に、労働の富になった。そして工場制度が産業の、すなわち労働の成熟したあり方であり、また産業資本が私有財産の完成された客観的形態であるように、産業は完成された労働である。実際また、ここではじめてどのようにして、私有財産が人間にたいするその支配を完成し、もっとも普遍的な形態をとって世界史的な力

となることができたかを、我々はみるのである」。

私的所有と労働の対立は、重農主義から産業資本に到り、産業資本のもとで人間労働の自己疎外は完成をみる。したがって「自己疎外の止揚」は産業資本的私有財産の止揚にまつ、つまり共産主義の到来にまつのである。

第三草稿は〔二〕に進んで「私有財産と共産主義」を論ずる。「共産主義は止揚された私有財産の積極的表現であるが、さしあたりは普遍的な私有財産である。共産主義はこの関係をその普遍性においてとらえるので、(一) 共産主義はその最初のすがたにおいてはただ私的所有の関係の普遍化と完成であるにすぎない」。「それゆえ私有財産の止揚は、すべての人間的な感覚や特性の完全解放である。しかし私有財産の止揚がこうした解放であるのは、これらの感覚や特性が主体的にも客観的にも人間的になっているという、まさにそのことによってなのである」。

「〔私有財産の積極的に止揚された段階では〕国民経済的な富と貧困とにかかわって、ゆたかな人間とゆたかな人間の欲求とが現われることをわれわれは見いだす。ゆたかな人間は同時に人間的な生命発現の総体を必要としている人間である。すなわち、自分自身の実現ということが、内的必然性として必須のものとして彼のうちに存する人間である」

「自己疎外の止揚」という主題を追求するわれわれとして、この点を確認しておきたい。その一つは19世紀中期のヨーロッパにおける共産主義の思想と用語の意味である。もう一つは私有財産の止揚の意味する内容である。

マルクスの私有財産の止揚、つまり生産手段の共有制についての理解は『経・哲草稿』から『資本論』に至る20年の間に成熟をとげている。

まず思想と用語。「共産主義」という言葉はむしろ、今日われわれが普通に共産主義の最初の段階として表象する社会主義をあらわしている。それがこの手稿当時の、ないしはこの個所での、マルクスの共産主義、社会主義についての思想と用語であったと解すれば足りると思う」。

したがってマルクスの使う「共産主義」という言葉は、例えば「私有財産の積極的に止揚された段階」の社会の概念とみることができる。哲学的

概念であり、「自己疎外の止揚」の局面を語る概念である。しかし、20年後のマルクスは私有財産、私的所有制の止揚の局面を経済的に「自由な人々の結合体」として、つぎのように論述している。

「共同の生産手段で労働し、自分たちのたくさんの個人的労働力を自分で意識して、一つの社会的労働力として支出する、自由な人々の結合体を考えてみよう。ここでは、ロビンソンの労働のすべての規定が再現するのであるが、ただし個人的にはではなく社会的に、である。ロビンソンのすべての生産物はただ彼ひとりの個人的生産物だったし、したがって直接に彼のための使用対象だった。この結合体の総生産物は、一つの社会的生産物である。この生産物の一部分は再び生産手段として役立つ。それは相変らず社会的である。しかし、もう一つの部分は結合体成員によって生産手段として消費される。したがって、それは彼らのあいだに分配されなければならない。この分配の仕方は、社会的生産有機体そのものの特殊な種類と、これに対応する生産者たちの歴史的発展度につれ、変化するであろう。ただ商品生産と対比してみるために、ここでは各生産者の手にはいる生活手段の分けまえは、各自の労働時間によって規定されているものと前提しよう。そうすれば労働時間は二重の役割を演ずることになるであろう。労働時間の社会的に計画的な配分は、いろいろな欲望にたいするいろいろな労働機能の正しい割合を規制する。他面では、労働時間は同時に、共同労働への生産者の個人的参加尺度として役立つし、したがってまた共同生産物中の個人的に消費されうる部分における生産者の個人的な分けまえの尺度として役だつ。人々が彼らの労働や労働生産物にたいしてもつ社会的関係は、ここでは生産においても、分配においても、やはり透明で単純である」(『資本論』邦訳大月版 S.93、P.105)。

マルクスの論述は「共同的なすなわち直接に社会化された労働」の特質を論じたものであり、「共同の生産手段で労働し、自分たちのたくさんの個人的労働力を自分で意識して一つの社会的労働力として支出する自由な人々の結合体」を論じたものである。

それは『経・哲草稿』の用語法にしたがうなら

ば、「人間の自己疎外としての私有財産の積極的止揚としての共産主義」にかんする論述である。しかし、20世紀に出現した歴史的体験としての社会主義は、『経・哲草稿』の言う「私的所有の止揚としての共産主義」と比べて異相である。『資本論』の言う「共同的なすなわち直接に社会化された労働」と比べても異相である。何よりもまず労働生産物は商品として存在する。『資本論』の論述は「およそ使用対象が商品になるのは、それらが互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからにはかならない」(S.87)とするのであるが、この社会主義の商品は生産手段の共有制が生み出したものである。

「人々が彼らの労働や労働生産物にたいしてもつ社会的関係は、ここでは生産においても、分配においてもやはり透明で単純である」とされた。しかし20世紀の社会主義の実際は、生産手段の共有制のもとであるが、労働は労働力商品の雇用労働の如く賃金形態であり、「共同生産物」は商品の形態をもって現われ、賃金として支払われた貨幣と相対する。労働、生産、交換の過程は不透明であり複雑でさえある。人々は私的所有の止揚されたのちにおいてなお、自己疎外の状況にあるかのようである。

Ⅲ 「疎外論」の進化

1 「疎外論」における労働と私的所有

若きマルクスによって提起された、1844年の「疎外論」は20世紀の我々のもとに至る、1世紀半の歳月にまさに有為転変を経過した。私はこれを進化の時期と熟成の時期に分けて考える。「進化の時期」としてはマルクスはその後の20年の研究の結果を『資本論』に集約している。疎外論は哲学的考究から経済学的研究へと進化する。

「我々が疎外された、外化された労働の概念から分析を通じて私有財産の概念を見つけ出してきたように、これら二つの要因の助けをかりて、国民経済学上のすべての範疇を展開することができる。そして我々は、たとえば掛値売買、競争、資本、貨幣といった各範疇において、ただこれら二つの最初の基礎の限定された、そして発展させら

れた表現を再発見するだけであろう」(「第一草稿」「疎外された労働」)。

また、非労働者が労働者およびその労働の生産物にたいする関係。「われわれは一方の側面、労働者自身にかんしての外化された労働をすなわち、外化された労働のそれ自身にたいする関係を、考察してきた。この関係の所産として、必然的結果として我々は非労働者が労働者および労働にたいしてもつ所有関係を見いだした。私的所有は、外化された労働の物質的な、要約された表現として、両関係を包括する。すなわち、労働者が労働と彼の労働の生産物と非労働者とにたいする関係と、そして非労働者が労働者およびその労働の生産物にたいする関係とをである」(国民文庫版『経・哲手稿』P.117)。

「疎外された、外化された労働によって労働者は、労働に疎遠な、労働の外に立っている人間の、この労働にたいする関係を生みだす。労働者が労働にたいする関係は、資本家(あるいはその他労働の主人がどう呼ばれようと)が労働にたいする関係を、生みだす。私的所有はこうして、外化された労働の、すなわち労働者が自然および自己自身にたいする外的関係の所産であり、結果であり、必然的帰結である」(同前 P.113-114)。

私的所有と労働者、労働および労働生産物の関係。さきの引用文は労働者が労働、労働生産物、非労働者にたいする関係、反対に非労働者が労働者、労働生産物にたいする関係に論及している。あとの引用文は労働者が労働にたいする関係、資本家が労働にたいする関係に論及している。これは労働者と外化された労働、私的所有を軸とする生産関係を論じたものである。

2 労働力所持者と貨幣所持者

しかし、この点について、経済学は「労働力の売買」という主題を立て、「特殊な商品としての労働力」を考察する(『資本論』第1巻第4章、邦訳、大月版 S.181、S.219以下)。

「労働力の保持者と貨幣保持者とは、市場で出会って互いに対等な商品所持者として関係を結ぶ…両方とも法律上では平等な人である。この関係の持続は、労働力の所有者がつねにただ一定の時

間を限ってのみ労働力（労働能力—引用者）を売ることが必要とする。なぜならば、もし彼がそれをひとまとめで一度に売ってしまうならば、彼は自分自身を売ることになり、彼は自由人から奴隷に、商品保持者から商品になってしまうからである。彼が人として彼の労働力にたいしてもつ関係は、つねに彼の所有物にたいする、したがって彼自身の商品にたいする関係でなければならない。…したがってただ、労働力を手放しても、それにたいする自分の所有権は放棄しない……。

「貨幣所持者が労働力を市場で商品として見出すための第二の本質的な条件は、労働力所持者が自分の労働の対象化されている商品で売ることができないで（なぜならその商品は労働者を雇って労働させた貨幣所持者の所有に帰しているから—引用者）、ただ自分の生きている肉体のうちにだけ存在する自分の労働力そのものを、商品として売り出さなければならないということである。

「貨幣が資本に転化するためには、貨幣所持者は商品市場で自由な労働者に会わなければならない。自由というのは、二重の意味でそうなのであって、自由な人として自分の労働力を自分の商品として処分できるという意味と、他方では労働力のほかには商品として売るものを持っていないで、自分の労働力の実現のために必要なすべての物から解放されておき、すべての物から自由であるという意味で、自由なのである」（大月版 P.221, S.183）。

マルクス『資本論』はこのように「貨幣所持者は商品市場で自由な労働者に会う」のであり、「この独特な商品、労働力」の所有者は「二重の意味」での自由人であった。しかし、前述の『経・哲草稿』『第一草稿』[四]「疎外された労働」ではやや趣が違っていて、そこでは「労働者は、これらの二重の側面に応じて、彼の対象の奴隷となる」（邦訳、岩波文庫版、P.89）のである。

「我々は労働者の対象化すなわち生産と、そのなかでの対象の、すなわち労働者の生産物の疎外、喪失とを、もっと詳しく考察してみよう」という研究課題における考究である。

「第一に、彼が労働の対象を、すなわち労働を（対象から）受けとるということにおいて、そして第二に、彼が生存手段を（対象から）受けとる

ということにおいて、対象の奴隷となる。それゆえ、第一に彼が労働者として、そして第二に肉体的主体として実存できるために、彼は彼の対象の奴隷となるのである。この奴隷状態の頂点は、彼がただひたすら労働者としてのみ、肉体的主体として自分を保つ（ことができる）ということ、そして彼がただひたすら肉体的主体としてのみ、労働者であるということなのである」（邦訳、岩波文庫版、P.89）。

マルクスはこの叙述ののち、「労働の外化とはどういう点に存するか」という自らの設問に答えて、「労働の外部」と「労働の内部」という区別を提起する。

「労働の外化はどういう点に存するのか？第1に労働は労働者に外的である、すなわち、彼の本質に属していないということ、したがって、彼は彼の労働のなかで自分を肯定せず、否定し、快く感じず、不幸と感じ、なんら自由な肉体的および精神的エネルギーを発展させず、彼の肉体を苦行で衰弱させ、彼の精神を荒廃させるということである。したがって労働者は労働の外でやっと自分の許に在る感じがし、労働のなかでは自分の外に在る感じがする。彼が家にいるように気楽なのは労働していないときであって、彼が労働しているときには、彼は気楽でない。したがって彼の労働は、自由意志的でなく、強制されており、強制労働である」（邦訳、国民文庫版、P.102）。

であるから、したがって、「さっきの貨幣所持者は資本家として先に立ち、労働力所持者は彼の労働者としてあとについて行く。一方は意味ありげにほくそえみながら、せわしげに、他方はおずおずと渋りがちに、まるで自分の皮を売ってしまったもはや革になめされるよりほかにはなんの望みもない人のように」（前出、『資本論』 S.191）。

労働者は商品市場においては自由人として、「労働力のほかには商品として売るもの」のない、「物から自由」という身分で登場する。しかし労働過程においては「自由意志的でなく、強制されており、強制労働である」という労働に従事する。労働対象としては奴隷である。この二つの論理状況は労働者はこのような *Vogelfrei* な労働力であるということにおいて、「自己を外化する労働は、

自己犠牲の、自己を苦しめる労働」(「第一草稿」
「疎外された労働」邦訳、岩波文庫版P.92)なのである。

3 株式会社—私的所有としての資本の廃止

マルクスは『資本論』第3巻第27章「資本主義生産における信用の役割」という章において、「信用制度は資本主義的個人企業がだんだん資本主義的株式会社に転化して行くための主要な基礎をなしている」として、株式会社制度に論及している。

株式会社の出現。「それ自体として社会的生産様式の上に立って、生産手段や労働力の社会的集積を前提している資本が、ここでは直接に、個人資本に対立する社会資本(直接に結合した諸個人の資本)の形態をとっており、このような資本の企業は個人企業に対立する社会企業として現われる。それは資本主義的生産様式そのものの限界のなかでの、私的所有としての資本の廃止である」(大月版S.452、P.557)。

ちなみに「疎外論」は「私的所有」についてつぎのように論じている。「私的所有の発展の最後の頂点においてはじめて、そのこういう秘密がふたたび現われてくる。すなわち一方ではそれは外化された労働の所産であり、そして第二にそれは、労働がそれをとおして外化する仲介手段であり、この外化の実現であるという秘密である」(前出『経・哲手稿』国民文庫版P.114)。

「私的所有」の含義はこのようなものであるから、『資本論』における「私的所有としての資本の廃止」は尋常ではない。すなわち、「外化された労働の産物」が「外化される手段」であり、「外化の実現」そのものである「私的所有」。これまで資本はこのような「私的所有」のかたちをとって存在したものが「廃止」され、株式会社として存在することになった。労働が「それによって外化される手段」はいまや株式会社であり、その株式会社は「生産手段や労働力の社会的集積」のうえに存在し、「個人資本に対立する社会資本の形態」である。その株式会社は単なる資本の集積体であるにとどまらず、「資本主義的生産の最高の発展」を現わす。

「株式会社では、機能は資本所有から分離されており、したがってまた、労働も生産手段と剰余労働との所有からまったく分離されている。このような、資本主義的生産の最高の発展の結果こそは、資本が生産者たちの所有に、といってももはや個々別々の生産者たちの私有としてのではなく、結合された生産者である彼らの所有としての再転化するための必然的な通過点なのである。それは他面では、これまではまだ資本所有と結びついている再生産過程上のいっさいの機能が結合生産者たちの単なる機能に、社会的機能に転化するための通過点なのである」(『資本論』第3巻、同前、S.453、P.557)。

株式会社において、「機能は資本所有から分離」されていて、「現実に機能している資本家」は「他人の資本の単なる支配人」と化し、資本所有者は「単なる貨幣資本家に転化」している。資本所有者は利潤を「ただ利子の形態でのみ、すなわち資本所有の単なる報償としてのみ」受け取る。そして利潤は「他人の剰余労働の単なる取得」にすぎない。ところで「この剰余労働は生産手段の資本への転化から」生ずる。また「現実の生産者にたいする生産手段の疎外から生ずる」。そこで対立は「上は支配人から下は日雇い人に至るまで、現実に生産するすべての個人にたいして生産手段が他人の所有として対立する」のである。ここに株式会社における疎外の関係の特徴がある。

信用制度のもとでの支配力。「株式制度—それは資本主義体制そのものの基礎の上での資本主義的な私的産業の廃止であって、それが拡大されて新たな生産部面をとらえて行くにつれて私的産業をなくして行くのであるが——この株式制度のことは別としても、信用は個々の資本家に、または資本家とみなされる人々に、他人の資本や他人の所有にたいする、したがってまた他人の労働にたいする、ある範囲内では絶対的な支配力を与える。自分の資本にではなく社会的な資本にたいする支配力は、資本家に社会的労働にたいする支配力を与える。人が現実所有している、または所有していると世間が考える資本そのものは、ただ信用という上部建築のための基礎になるだけである」(『資本論』第3巻、同前、S.455、P.559～560)。

株式会社企業形態の新局面。マルクスは株式会社論として、すでに資本家の分化に論及している。すなわち、機能資本家、「現実に機能している資本家が他人の資本の単なる支配人、管理人に転化」。今日言うところの最高経営管理者層である。他方、「資本所有者は単なる所有者、単なる貨幣資本家に転化が進む」。彼らが受けとる配当は「利子の形態でのみ、すなわち資本所有の単なる報償として」である。この「資本所有が今や現実の再生産過程での機能から分離」は今日にひきつづく。ここに言う「資本所有」は株式所有であり、株主にたいする指摘である。そうであれば、すべての株主は一律ではなく、支配株を保有する株主は一般の株主から区別されるものであり、支配株保有を基礎に、しばしば機能資本家、最高経営管理者層の任命にかかわる。

ここで「疎外論」に立ち戻るのであるが、『経・哲草稿』の著者は、「労賃は疎外された労働の直接の結果であり、そして疎外された労働は私有財産の直接の原因である」ことを指摘し、「私有財産にたいする疎外された労働の関係」（岩波文庫版P.104）に論及している。『資本論』の著者は剰余労働の発生を論じて、それは「上は支配人から下は日雇い人に至まで現実に生産に従事するすべての個人に対して、生産手段が他人の所有として対立することから生ずる」ことを指摘した。また、「現実の生産者にたいする生産手段の疎外から生ずる」としている。「資本主義的生産の最高の発展の結果」としての株式会社の企業形態における疎外関係をここにみる。

4 いわゆる「否定の否定」以降

「疎外論」の見地から、マルクスの言う「資本の本源蓄積、すなわち資本の歴史的生成」の帰着、そして転換としての「社会的、集団的所有」の成立に至る状況を考察する（『資本論』第1巻第24章、邦訳、大月版S.790、P.994）。

〔1〕 社会的生産力の発展と生産様式の桎梏

「資本主義的生産様式そのものの内在的諸法則の作用」と「諸資本の集中」。すなわち「少数の

資本家による多数の資本家の収奪と手を携えて、ますます大きくなる規模での労働過程の協業的形態、科学の意識的な技術的应用、土地の計画的利用、共同的にしか使えない労働手段への労働手段の転化、結合的社会的労働の生産手段としての使用によるすべての生産手段の節約、世界市場の網のなかへの世界各国の組入れが発展し、したがってまた、資本主義体制の国際的性格が発展する。この転化過程のいっさいの利益を横領し、独占する大資本家の数が絶えず減ってゆくにつれて、貧困、抑圧、隷属、搾取はますます増大してゆくが、しかしまた、絶えず膨張しながら、資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され供給され組織される労働者階級の反抗もまた増大してゆく。資本主義的独占は、それとともに開花し、そのもとで開花したこの生産様式の桎梏となる。生産手段の集中も労働の社会化も、それがその資本主義的な外皮とは調和できなくなる一点に到達する。そこで外皮は爆破される。資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」

後日、マルクスはこの叙述を以て「これは一切の従来の歴史の法則だ」と評論した。（『ドイツ労働者党綱領評註』『ゴータ綱領批判』所収、西雅雄訳、岩波文庫版P.22）。またこの文献のアドラッキ編集者註は、これを「詳しい古典的な叙述である」とした。まさにマルクス主義学説の主要な論述であり、現代においても変りはない。この叙述が「古典的な叙述である」のは、資本主義的に発達したヨーロッパを背景とし、ヨーロッパ労働者協会運動の総括だからである。こうした「歴史の法則」の概括は後世、レーニンから毛沢東に至る傑出した各国のマルクス主義者が試みるのであるが、それはまた後進国ロシアや中国における「歴史の法則」の概括であり、対比するならば異質でさえある。この点は後出の「現代社会主義」考察に譲る。

マルクスによる「歴史の法則」に関する「古典的な叙述」の核心は、「資本主義的生産そのものの内在的諸法則の作用」によって生まれた生産力水準、科学技術水準、文化水準が「資本主義的な外皮とは調和できなくなる一点に到達する」としたことにある。マルクスの論述にはつぎの諸命題

が含まれる。

- (1) 個別資本の競争。競争を通ずる個別資本の規模拡大。生産手段の集積と集中。資本独占の形成。
- (2) 労働過程の大規模な協業形態の出現。共同的利用形態の労働手段の結合。労働手段の大規模化と結合的社会的労働力の形成。
- (3) 労働手段の大規模化と科学的意識的な技術的応用。労働力の熟練の向上と文化的水準の向上。
- (4) 世界市場の形成と国民経済の編入。資本主義体制の国際的性格。
- (5) 労働者階級の貧困、抑圧、隷属、墮落、搾取の強度。資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結合され組織された労働者階級の反抗の増大。
- (6) 生産手段の集中、労働の社会化と資本主義的生産様式とその外皮との矛盾。
- (7) 資本主義的外皮の爆破と資本主義的私有の最後の鐘。

上述をマルクス主義理論の形成という観点からみると、そこに貫くのは、生産力と生産関係の矛盾、上部構造と経済的土台の矛盾、つまり史的唯物論の方法である。マルクスが後日、そこに表現されたのは「歴史の法則」だとしたのは意味が重い。

(2) 「否定の否定」および三大分業の廃棄。

マルクスは『経済学・哲学草稿』において、「人間の自己疎外としての私有財産の積極的止揚としての共産主義、それゆえにまた人間による人間のための人間の本質の現実的な獲得としての共産主義」(岩波文庫版P.130)を提起した。哲学的思考としての提起であるが、『資本論』においては同じ問題を「否定の否定」として論じている。その論点の特徴は、自己疎外の止揚を私的所有制の廃棄を軸心として論じた点である。

(1) 否定の否定および個人的所有

「資本主義的生産様式から生まれる資本主義的取得様式は、したがってまた資本主義的私有も、

自分の労働にもとづく個人的な私有の第一の否定である。しかし、資本主義的生産は、一つの自然過程の必然性をもって、それ自身の否定を生みだす。それは否定の否定である。この否定は私有を再建しはしないが、しかし資本主義時代の成果を基礎とする個人的所有をつくりだす。すなわち、協同と土地の共同占有と労働そのものによって生産される生産手段の共同占有とを基礎とする個人的所有をつくりだす」(『資本論』第1巻第24章、S.291、P.995)。

(2) 否定の否定に存する肯定

フォイエルバッハは否定の否定を、もっぱら哲学の自己矛盾としてのみ把握している。……否定の否定のうちに存している肯定、あるいは自己肯定と自己確証は、まだ自己自身に確信のない肯定、それゆえ自分との対立物をになっている肯定、自分自身を疑っており、それゆえ証明を必要とする肯定であり、したがって自分の現存によって自分自身を証明してもいないし承認されもしない肯定であると解されている。……ヘーゲルは否定の否定を、——そのうちに存している肯定的な関係からいえば、真実の唯一の肯定的なものとしてとらえ、——そのうちに存している否定的な関係からいえば、一切の存在の唯一の真なる行為および自己確証行為としてとらえたのであるが、そうすることによって彼は、たんに抽象的、論理的、思弁的な表現にすぎなかったが、歴史の運動にたいする表現を見つけた」(『経済学・哲学草稿』岩波文庫P.192)。

(3) 株式会社の形成と私的所有の廃止

「1. 生産規模の非常な拡張が行なわれ、そして個人資本には不可能だった企業が現われた。同時に従来は政府企業だった、このような企業が会社企業となる。2. それ自体として社会的生産様式の上に立っていて、生産手段や労働力の社会的集積を前提している資本が、ここでは直接に、個人資本に対立する社会資本(直接に結合した諸個人の資本)の形態をとっており、このような資本の企業は個人企業に対立する社会企業として現われる。それは資本主義的生産様式そのものの限界のなかでの私的所有としての資本の廃止である」

(『資本論』第3巻第27章、S.452、P.556-7)。

(4) 結合生産者の所有に転化する通過点

「このような（株式会社におけるような——引用者）資本主義的生産の最高の発展の結果こそは、資本が生産者たちの所有に、と言ってももはや個々の生産者たちの私有としてのではなく、結合された生産者である彼らの所有としての、直接的社會所有としての所有に、再転化するための必然的な通過点なのである。それは他面では、これまではまだ資本所有と結びついている再生産過程上のいっさいの機能が、結合生産者たちの単なる機能に、社会的機能に、転化するための通過点なのである」(『資本論』第3巻同前、S.453、P.557)。

(5) 株式会社制度、資本主義的生産株式の廃止

「これは（株式会社制度——引用者）資本主義的生産様式そのもののなかでの資本主義的生産様式の廃止であり、したがってまた自分自身を解消する矛盾であって、この矛盾は一見して明らかに、新たな生産形態への単なる過渡点として現われるのである。このような矛盾としてそれはまた現象にも現われる。それはいくつかの部面では独占を出現させ、したがってまた国家の干渉を呼び起こす。それは新しい金融貴族を再生産し、企画屋や発起人や名目だけの役員の姿をとった新しい寄生虫を再生産し、会社の創立や株式発行や株式取引についての思惑と詐欺との全制度を再生産する。それは私的所有による制御のない私的生産である」(『資本論』第3巻、同前 S.454、P.559)。

(6) 生産手段共有制社会の労働

「生産手段の共有の上に建設された協同組合的社會の内部においては、生産者は彼らの生産物を交換しない。ここでは生産物に転化された労働は、この生産物の価値としても、またそれらの有する物的性質としても現われない。というのは、今や資本主義社会とは反対に、個人的労働はもはや間接にではなくて、直接に総労働の構成部分として存在するからである。……

ここで問題となるのは、それ自身の基礎の上に発展したものとしてではなくて、反対に、正に資本主義社会から生まれるものとしての共産主義社会である。従ってそれはあらゆる点において、経済的に、道徳的に、精神的に、それがその母胎から出て来るところの旧社会の母斑をまだ付着している。それに応じて個々の生産者は——控除の後——彼が社会に与えたところのものを正確に取り

戻す。……それが等価物の交換である限り、ここでは明らかに、商品交換を規制すると同じ原則が支配する。……だから平等の権利はここでは依然として、原則においてブルジョア的権利である。……かかる進歩にも拘らず、この平等の権利はつねにブルジョアの拘束を受けている。生産者の権利は彼等の労働給付に比例している。平等は平等の尺度すなわち労働で測定されることにある」(マルクス「ドイツ労働者党綱領評註」岩波文庫『ゴータ綱領批判』所収、P.26-27)。

(7) 分業にたいする奴隷的依存の消滅と生産力の成長

「平等の権利は不平等の労働にたいする不平等の権利である。……すべてのかかる不都合を避けるためには、権利は平等でなくて、不平等でなければならない。しかしかかる不都合は、資本主義社会から長い生みの苦しみの後に生まれ出たばかりの、共産主義社会の第一段階（今日言うところの社会主義社会の意——引用者）においては不可避免的である。権利は社会の経済形態およびそれによって制約された文化的発展より決して高くはありえない。

共産主義社会のより高い段階（今日言うところの共産主義社会の意——引用者）において、すなわち分業の下における個々人の奴隷的依存、それとともにまた精神的労働と肉体的労働との対立が消滅以後、労働が単に生活手段でなくて、第一の生活の必要にさえた後、個々人の全面的発展とともに、また生産力が成長して協同組合的富のすべての源泉が溢流するに至った後、その時はじめて狭隘なブルジョア的権利の地平線は全く踏み越えられ、そして社会はその旗にこう書きつけるであろう。各人はその能力に応じて、各人はその必要に応じて！」(マルクス「ドイツ労働者党綱領評註」同前、P.28-29)。

〔あとがき〕

小論は2000年4月に脱稿したものを、いま改筆、加筆を経て、上下二篇のかたちにとめたものである。上篇は主としてマルクス「疎外論」を論述し、下篇は中国を主題として現代社会主義を、疎外の諸命題にそくして論述する。ちなみに上篇2000年4月稿は「マルクス『疎外論』の周

辺」と題し、嶋田力夫「マルクス『経済学・哲学草稿』の第一草稿について」——マルクス「経済学批判体系プラン」の形成上における意義——を「読んで」の副題を付した。また、今回改稿にあた

り、Ⅲ章の「4 いわゆる「否定の否定」以降」を加筆した。なお、文中引用文については、仮名遣いは出典を訂正して新仮名遣いに改めて引用した。(2005年2月10日 脱稿)。